

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	龍南
Author(s)	
Citation	龍南會雜誌, 141: 88-94
Issue date	1911-06-05
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6240
Right	

龍 南

送卒業生諸君

旦○暮○仰○蘇○山○
日○月○如○夢○流○
兄○等○了○一○階○
歌○哉○鹿○鳴○詩○
解○纜○望○四○海○
志○須○存○遠○大○
天○下○俟○偉○才○
舉○盃○壯○此○行○

猛○煙○養○氣○天○
三○歲○如○閃○電○
螢○雪○輝○桂○冠○
舞○哉○泮○水○邊○
澎○湃○前○途○遠○
大○成○要○堅○忍○
使○命○在○青○年○
燕○樂○送○諸○君○

明治四十四年初夏

天 行 生

團體像ラオコオンの苦み。

(對話)

人物。 四人の學生。

時。 五月十九日、校風問題に就いて演說會が開かれた日の夜。

場面。 さる、レストランの南に突出せる右の二階。

星が光つてゐる。月はまだ上らぬ。暮れたばかりの静かな宵のに。聊か官能に緊りを覺る、冷かな夜。二階の欄に沿つて柳の木が電燈の光に烟つて、覺えない一條の、地虫の聲が、どこまでもなく起る。制帽に袴の四人は、想ひ想ひに、欄に凭つて坐につく。興奮してゐる形跡は眼の光にも宿つてゐる。

○殉教者と伍すべき底の心情が、「試み」に會つて吐露せられたと考へるには、——俺れにはあまりに落語的の演說と想はれたが。

○さう、さう。校風論にた愛嬌は御免だな。

○何故ま少し徹底した、痛くて愉快な思想はないのだらうか。

○は、は、は、さうすると、我輩も其の仲間かね。○否な。さう云ふ譯ちあない。わ前のなんかは、いゝ意味に於て振つたものだ。

○「凡での模倣は亡ぶ可し、亡ぶべき運命を俱有しである。」あの時舌打した人があつた。

○俺あ。眞面なる告白が極端に是認し得られる場合だと想つたから。

○尤もだ。

○君のは慙うでしたね。「條例は先天的に條件其の物を屠らんに生れた」と。

○……………。

○上乘だ。ショペンハウエルに言はせると意志が想ふことに對して法則を命するのは明白に矛盾で「欲すべし」といふのは木の鐵と同じ事ださうです。自由に對しては法則なんか豫想し得べからざるものぢやありませんか。但し自由と云ふのは我儘の謂ではない、而して自覺は、意志の道德的の根底だと僕あ想ふ。

○落語のやうな演説の中にも比較的問題になるものがある。「現代の青年は須べからく活氣あれ」と呻つたものがあつたね。「活氣あれ」とか、「た互に振ひまぜう」とかは、校風とは何ぞやとか何ぞか云ふ論議に提起も暗示も與へない雜駁なものぢないか。

○それは實際だ。「活動なる」言葉は冷靜なる不動の原理の何物をも啓示してゐるものでない。活動の説者は或は頑固で、讓歩せぬかも知れぬが、是は何物にも讓歩し得るものだ。活動にも種々毛色があらうが、慢然たる活動は、人生に可能なる或種の romance だ sweeties の工夫を没却するものだ。

○集會條件に對して否何に對したところか、我輩は人々の評價其の物の中に大なる欠陥を認めすにはゐられない。

○靈の高翔の前に物質を超越しきれない肉的執着の狂跳も活動ぢないか。

○同感だ、自覺の心は凡その人間的條件に向かつて indiffence の心である。竊盜罪に就いての法令が出たからと云つて、我々に對する侮辱だと頑張つた人間は澤山はあるまい。

○一寸話が前に返るが九州人、殊に熊本人をストームの權化た位考つてゐる人々に就いて、熊本人士は果して侮辱を感じぬだらうか。

○其のストームを望んで過々の御出馬に對しては「物好でゐらつじやる」と位の讃辭でまねおぶぢら

う。

是の後に會話は、言論の自由と束縛と云ふことから、進んで自棄的態度に柄にもない傲氣を味つた人々に就いての論議があり、親爺がかつがれて後、忠君は日本個有の道德と言はうより、寧ろ我々が先天的に俱有せる本能だと言ふ結論に達し自己防禦と云ふことから話が進む。

○僕あ、自分の言ふことすること皆、自己防禦のやうで氣になつて、仕方がない。

○さう云ふことは、誰にもある事かも知れぬ。何だか自分の周圍に繩を張り盡して、遂には身動きも出来ぬやうにね。

○兎に角、態度が消極的で、憧憬的の心情が不足する言ふこと、つまりる所性格が弱いと云ふ点に到達するかも知れん。

○だが其の憧憬すらもセルフ、デフエンスの意味で迫つて來るのです。

○それ寧ろ病的だ。

○僕もさう云ふ想に度々囚れるのですが、さう云ふ時は、自分が何だか憐憫で情けなくなります。

○セルフ、デフエンスは近世生物學者の通論です。

ね。不思議なことにば、恣言ふ議論を抱いて猶基督を信してゐるものがあることです。萬物が自己防禦の爲になさるゝとしたら、惡魔も其の存在を認めらるべきで、神は唯一人善の創造者として残るべきです。

○面白くもない、其麼詭辨は御免蒙る。

○眞面目だ。詭辨なものか。は、は、は。

○没分曉漢は仕方がない。時に僕あ想んですが、今日の集會の内にも個人主義と言ひ出すと、彼奴が親睦會の會費なんか、眞先に失敬する奴だ。位に想つてゐるものがゐはすまいか。

○れるとも、深い考へもなしに強いて一個の見界を構へんとする人間が多いから。

○それで、僕あ初め斷はらうかと想つたがね、さう／＼調子に乗つて忘れて終つた。が考へて見ると莫迦らしくて。

○我輩は、君等の議論を採用してゐると、校風の設立如何を危まざるを得ぬね。實際個性とか自己とか云ふ代物と校風とは兩立すべきものか。

○校風とは自己を許容し得ない程に狹猛なものだら

うか。

○校風とは其の校内の比較的勢力ある主張と態度、其の物だらう。

○さうすると頭數で分け得る愚なものぢないか。

○龍南の勢力ある主張とは何か。

○形式觀念に屈服せられた、剛毅と朴訥がある。

○所謂口癖と云ふものさ。

○剛毅朴訥に欺かれたと云つたのは君だつたらう。

○所謂と云ふ二字が其の上に必要だ。

○吾々は吾々の力に信賴して、自覺の礎を敷かうぢやないか。自覺に立つたら理想郷は眼の前にぶらつく——何カ・ラ・イルの引用は免だとか、——まあ

聞き給へ。何の報酬も豫想せずに追従や模倣でなく、自己の力の擴充せる處に動きたい。何等のZWECKがなくともいい。否自覺に立つたる力の擴

充がSELBSTZWECK、其物で嚴乎として歩みたい。BYRONの筆に成つた彼のCHELTONの囚人の有

せるが如き道義心を赤裸々にして抱きたい。真理は一つである。是の下に眞の統一せる校風は絶望すべきものである。是の間に全きものを抱く人の心

さものであるか。是の間に全きものを抱く人の心

は果して無意味のものであるか。

○我輩は斯く信ずる、人々の現在把握せるある評價はかの團體像ラオコオンに於ける蛇である。一個の彫刻としても見たるラオコオンには是の苦惱の爲に泣き

叫ぶと言ふ個性の發現（現にラオコオンの像はその位置あつて泣いてゐないと言ふのは事實ださうである）は一般の美と兩立せぬさうである。（レッシンカの説譬へ其の形態が刻

まれたとしても、描寫の目的である叫びとその効果は一向に現はれ得べからざるものださうだ（シムン・ハウエルの説）。而し一個のラオコオンとして見たる吾

々現在の狀態は優に其等を許容し得るものである。勿論明白の事實だ。それで吾々は自己裏心の思想感情を欺かないで、苦しき時は泣かうぢないか。笑

ふ可き時は笑はうぢないか。人から教へられて泣くでない笑ふでない。眞に是の泣き、笑ひが、自己

其の物の体现であつて欲しい。想ふに人は眞に泣きも出来ない。笑ひも出来ないデイレンマに陥つてゐるのではないか。

○兎に角、君の議論は、眞面目なる、自己に凭れたる、個性の發現を極端まで、許容し得る、一瞬も必

要である云ふことにあるのか。

○まあさうだ。眞の校風は未だ存在せざる校風であるにせよ、是に對する眞實の欲求は半は其の獲得である。自己に對する絶對の眞理が凡てに共通なる客觀的眞理となるまでの征服である。それまで自己各々の道を踏むも痛快だらう。だが前以て要求すべき問題は、「眞實なる欲求」であることだ。坐興と酒の問題でない。

四人無言。間

○大分晚いやうだ。た、開きにしようか。

○うむ

○歸つて寢て終つても惜いやうな晩だな。

○歩るこうぢやないか。

○月の出るまで。

○可矣。

四人退場 (完)

雑誌編輯室移轉論

僕は去年の一學期龍南會雜誌編輯室に前半は暑い後半は寒い日子を送つた事がある。初めの大半は僕

一人で寂しく暮したものだ。後は臥虎君が這入つて來たので急に話し相手が出來て紀念號發刊の事務も著しく進捗した。而し學期末になつて臥虎君は心が落ち附かぬといつて下宿に移つた。僕も試験が眼前に迫つて居るのを見て其あとを追ふて委員室を出て下宿に移つた。一學期は誰も委員室に入るものがなくて了つた、三學期即ち本學期に入つて壺南翁君が少からざる希望と抱負とを持つて委員室に入つたが、十日とたぬ内に「居らるゝところでない」「あんなところで創作は出來ない」といつてズイと下宿に移つた。

要するに雜誌部委員室は空虚で續いて居る、只空虚を守つて居るところのものは、白い電燈の笠と、濫色をした十九世紀末の古い諸雜誌が塵と共にある計りである。本田部長を初め委員が集ると、いつも雜誌部委員室變更移轉論が出る。何といつても先づ八百の會員に訴へて少し考へて貰はねばならぬ、少くとも同情の聲援が求めたい。

然らば何故しかく居るに堪へぬか？
第一に委員室少くとも雜誌部委員室は其性質上位

置が悪い。三寮の中一番元氣な者が集つて居ると稱せられて居る北寮の中央、而かも廊下が十字になつて居る交通の衝に當つて居るので難省を極むる甚しい。三階から降りてくる者、洗面に行くもの、食堂に行く者歸る者、外出する者、入浴に行く者、運動に出るもの、娯樂室に行くもの、何れも出る者は必づ入つて来るから其人通りの多いのは實に驚く、之は晝だが、沈思し默考すべき、夜の七八時より点檢前後までは、四邊の天地寂寥にかへれるため此等の噪音は一層八釜しく聞ゆる、それから漸く讀書し筆を執らうと自ら興に入つたと思つて居ると、小使が各寮各室の電燈を消しに来る、但しどうした間違で全寮電燈の本局を雑誌編輯室に設置したのか、小使が蓋をガタリと開けて一々ギチツ／＼と電流を切る、ドアをバタンと閉めて出て行く。どう／＼爲す事も無しとして折角の興がさめてしまふ。

それから終夜燈は特別自習室と、炊事委員長室を除いて雑誌部委員室にのみあるのだから、一般の消燈後、ある不規則な勉強家が辭書を持つてコト／＼委員室に来る、知を辱せざる人には勿論来るなどある

云へよう筈がないが、嘗て言葉も交した事のない方が、許可を受けない先きにだまつて電燈の下に座を占めて、バラ／＼辭書をくり初むる、委員たるもの度膽を抜かれるが、恁んな豪傑には一步を譲つて恭しく默許する、勿論編輯子は學期の央以前は樂で、央以後試験迄が多忙を極めるのだから、前半は多く早く寢室に行く、其あとに右の勉強家や豪傑連がいづも來て居るのを例として居るのだから急に來るなどは云へぬ。此事は夜計りでない、試験前などは朝の三四時頃から行はれる。以上の事は些細な事だが、雑誌締切等に迫つて居る時などは非常に迷惑に感ずる事が多い。

又冬などはいつも火鉢の側に人がたかる、それも授業のある日の晝丈けだから、別に差支へはないが、新刊の文學雑誌など机上に置いてゐると、案内なしにだまつて持つて行く、多くは三四冊か五六冊するど、ひよつくり机上に舞ひ戻つて居るが、時には行衛不明となる事が多い。

以上述べ來つたのは僕等が實感の二三に過ぎないが窓の下で小使が木炭、反古の集散の時等、窓をあけ

て居られない事など、筆は来れはくもあつてもあるが、
又は或は「其位などゝろで平氣でやつて行く位でな
ければ」云々かも知れん。而しそれは少しは無理
と思ふ。如何となれば由來雜誌部に追ひ込まれる人
間は神經過敏な奴が多い、また神經過敏な感情の鋭
敏な奴でなければ筆を執つていたづらをやる馬鹿は
居ないと思ふ。

「沈思すべきところでない」「熟考すべきところ
でない」「創作すべきところでない」——どの某々
の言實に然りとと思はないか、少くとも吾人のため、
また幾多後輩のため、沈思、熟考、創作、事務に適
した例へば南寮の東室の如き又は新寮のある一室の
如きに——出來得べくんば理髮室位の家にても武夫
原の一角に——移轉して貰ひたい。

もしそれ今迄幾多の先輩がそれにて満足して來た
ではないかといふものあらば、一々其責任を果さん
がために余儀なく此不景氣な室に押込められた人々
を捉へてきけ。必ずや苦き經驗を語るであらう。

嘗て臥虎君が僕に言つた「今廊下を通る者が、雜
誌部の委員は損な役目だね」、試験前にあんなに忙

しは事をやつてゐるといつて居たよ。多少は僕等
に同情して呉れる人もあるやうで嬉しい。此の如き
同情ある會員諸君の一片の同情と、總務其他當局の
推察、盡力とによらば、必ずや吾人に満足と與ふる、
而して諸君にも満足と與ふる事務を執る事が出来る
やうになる事と思ふ。(天行)

編輯室より

●雜誌部の豫算を慘酷に削られた爲め、此度の如く投書が多いと、
何ともする事が出来ぬ。止むなく二部三年乙名古屋君の「人々
の特徴」及同演口君の「庭と小鎮」へ之は頗る奇抜な物だ。第
次號へ廻した。又細川君の「水泳史」をも斷つた、深く諸君の御容
謝を乞ふ。

●之が爲め引いては吾々同人の上にも及ばし龍南の活文字を多數割
受するに到つた、凡てが物質本位の世の中だから致方がない。

●但し此度の雜誌は比較的眞面目だと云ふ事を自信する。濫りに○
○入りの告公文みたいな物を載せて、他人の劣等なる好奇心を發挑
するやうな事かなかつたのは可哀しい。

●時將さに夏に入つて、吾等は炎の如き光に浴して、更に新しい力を
感ずる。本誌の足らざる所は九月より筆硯を新にして之を補ふ事を
期する。

●その口に神をほむる歌あり。其手にもるはの劍あり。(委員)